他者比較が「ふつう」認知および感情に及ぼす影響(1)

小学校低学年の場合

○生井裕子¹・黒石憲洋²・佐野予理子³(¹ 桐朋学園女子部門・² 日本教育大学院大学・³ 清泉女学院大学)

キーワード: 「ふつう」, 他者比較, テスト場面

Are elementary school students pleased at “normal” academic achievement?

: In the case of the first and second grades

Yuko IKUI¹, Norihiro KUROISHI² and Yoriko SANO³(¹Toho Gakuen Joshi Bunon. ²Japan Professional School of Education, ³Seisen Jogakuin College)

Key Words: “normal”, social comparison, test situation

目 的

日本人は, 周囲と調和していること, 一致していることに価値を置くといわれている。これまでの研究では, 自分を「ふつう」だと思ふこと(「ふつう」認知)は, 高い安静状態と低い否定的感情と関連があることが繰り返し示されてきた(佐野・黒石 2005; 佐野・黒石 2009; 黒石・佐野 2009 ほか)。それは, 様々な世代間比較においても, 一貫してみられる傾向であることが示されている(佐野・黒石 2013; 黒石・佐野 2013)。しかし, 情緒発達, 認知発達のレベルが成人とは異なる年代においては, 「ふつう」認知と感情状態の関連について, 他の世代で得られた結果と異なる可能性が考えられる。今回は「ふつう」認知と感情状態の発達の特徴を捉えるために, 小学生を対象とした調査を行った。本発表では, 小学校低学年を対象とした調査の報告を行う。

方 法

公立の A 小学校にて, 低学年児童 193 名(1 年生 96 名, 2 年生 97 名; 男子 92 名, 女子 101 名)を対象とした質問紙実験を実施した。質問紙は場面想定法を用いて, 回答者自身をストーリーの主人公として想定させ, その場面での「ふつう」認知および感情状態について測定を行った(すべて 4 件法)。

場面設定 実力テストの結果を仲の良い友人 4 人と比較するという場面設定で, 友人の得点 70 点台に対し, 主人公の得点を高条件 93 点, 中条件 74 点, 低条件 57 点として操作した。場面をイメージしやすいよう, 回答者と同性の主人公が, 同性の友人たちと得点を比較している場面の挿絵を挿入し, 男女別に質問紙を配布した。

測定尺度 「ふつう」認知の測定として, 「ふつう」認知尺度(佐野・黒石 2009 など)から, 小学生向けに 6 項目(ふつうだと感じる, まわりの人からずれている等)を選出し, 分析には 4 項目($\alpha=.61$)を使用した。感情状態は, 一般感情尺度(小川ほか, 2000)の 3 つの感情状態を測定する項目の中から, 小学生に馴染みのある言葉が使用されたものを 4 項目ずつ選出し, 「肯定的感情」(たのしい, ゆかいだ等) ($\alpha=.82$), 「否定的感情」(びくびくした, おそろしい等) ($\alpha=.58$), 「安静状態」(おだやかな, のどかな等) ($\alpha=.84$) を測定した。更に, 小学生にとって身近に感じやすい, 悲しみ感情 4 項目を独自に追加し, 「悲しみ」(かなしい, ざんねんだ等) ($\alpha=.85$) を測定した。なお, 感情状態については, 表情カード(本田・鈴木 2010)の中から, それぞれの感情語項目に対応する表情を 3 名で評定し, 協議によって一致した表情について, 項目に対応させて質問紙に記載した。

結 果

場面設定は, 回答者にとって具体的にイメージできていた($M=3.2$, $SD=0.93$, $t(179)=9.98$, $p<.01$)。また, テスト規範も十

分に認識されていた($M=3.7$, $SD=0.76$, $t(182)=20.62$, $p<.01$)。「ふつう」認知および感情状態を従属変数とし, テスト地位(高・中・低)について分散分析を行った(図 1)。

図 1. 低学年の各条件における「ふつう」認知および感情状態

「ふつう」認知 地位の主効果に傾向が見られ($F(2, 189)=2.99$, $p<.10$), 高条件は低条件より「ふつう」認知が高かった。
肯定的感情 地位の主効果が見られ($F(2, 187)=11.19$, $p<.01$), 高条件は中・低条件より肯定的感情が高かった。
否定的感情 地位の主効果は有意ではなかった($F(2, 189)=.732$, $n.s.$)。
安静状態 地位の主効果が見られ($F(2, 187)=3.14$, $p<.05$), 高条件は低条件より安静状態が高かった。
悲しみ 地位の主効果が見られ($F(2, 189)=28.39$, $p<.01$), 高条件は低・中条件より悲しみが低かった。

考 察

これまでの先行研究において, 他の年代では「ふつう」認知は低い否定的感情と高い安静状態との関連が指摘されてきたが, 小学校低学年についてはテスト成績の得点がより高い場面で, 肯定的感情と安静状態が高くなるという結果が示された。また, 「ふつう」認知についてもテスト成績の得点がより高い場面で, 自分を「ふつう」であると感じる傾向が見られた。これは, 場面設定が社会的望ましさの度合いが高いものであったため, 「ふつう」認知が周囲との一致よりも, 規範意識に影響を受けた可能性が示唆される。

また, 他の年代と比較したとき, 低学年では否定的感情が十分に認識されておらず, 結果にも反映されなかった。一方, 「悲しみ」については十分に認識, 反映され, 「肯定的感情」「安静状態」についても同様であった。このことは, 低学年についてはネガティブな情緒の中でも, 不安や緊張感といった否定的感情の分化が十分に起こっていないことに由来する可能性があり, 低学年に固有の結果であったと考えられる。

今後は, 社会的望ましさの文脈に左右されにくい場面設定での調査を通じて, 低学年の「ふつう」意識のあり方についてさらに検討を重ねることが望まれる。